

ま え が き

世界の歴史において、各国が今日ほど教育に大きな期待をかけている時代はないであろう。まさに教育競争・教育爆発の時代である。先進国では今日の飛躍的な科学の発達に応ずる人間形成を目ざし、後進国では民族の興隆を目ざして、それぞれ教育への熾烈な努力がなされている。その中心は、いかに子どもの学力を高め、その能力を開発するかにあるようである。ところがまた、今日の社会では、青少年の非行化が問題となり、その健全育成が大きくとりあげられているため、学校教育における生活指導や道徳教育の問題が、その前面におし出されているようにも見受けられる。しかし、学力と学習指導の問題は、学校教育における中心的な課題であることには変わりはなく、その進歩改善にたゆみない研究努力が営まれている。むしろ、この学力向上の能率化を性急に求めるあまり、近視眼的な指導技術がはばをきかせているところに、今日考えなければならない学習指導の問題があるように思われる。

当教育研究所では、昭和34年度以来継続してきた学力と学習指導に関する5か年計画の実証的研究を、昨年度をもって一応終わった。その成果は毎年度末にまとめ、合計15冊の研究紀要として刊行してきた。また、その最後の3年間は、全国教育研究所の学習指導に関する共同研究の幹事県として参加し、国語・社会・算数数学・理科の学習指導研究シリーズ計12冊の原稿執筆にも尽力した。

ここで、過去5か年間の研究を顧みると、われわれは、学力と学習指導の根本を考え、学習過程における子どもの思考や理解・認識などの深まる過程とその指導のあり方について、実際の授業の場で実証的に究明してきたのであるが、その間に次のようなことがわかってきた。子どもたちを精細にみると、その思考過程や理解過程などには相当の個人差があり、その個人差はパーソナリティの内部に深く根ざしているものであって、単に知的なはたらきのみでなく、そこには情緒的および意欲的な面の影響が考えられること。したがって思考や理解を深めたり、また技能の向上を図るためには、もっと児童生徒一人一人の内面に触れるきめの細かい指導が必要であると考えた。

それで、今年度から当教育研究所で推進する第二次3か年計画の「学力向上のための学習指導改善に関する共同研究」では、これまでの研究の上に立って、一人一

人の子どものパーソナリティの内面に目をむけ、思考の様態をさらに探究するとともに、情緒や態度などについても究明し、これに応じた学習指導のより具体的なものを求めて、子どもの思考や理解をいっそう深め、技能の向上をいっそう図ろうとする研究にはいることにした。

今年度は、その第一年次の研究として、またその緒についたばかりであるが、これまでの研究をまとめて、中間報告をすることにした。

この紀要に集録したものは、社会、体育における学習態度と教科に対する態度の研究である。

社会の研究は、これまで研究してきた歴史認識の問題について、これを深める学習態度の形成というねらいで研究を発展させることにした。その第一次研究として中学2年生の歴史的概念の形成過程における考え方・感じ方・見方の事例調査と、その結果の考察を通して、生徒が歴史認識を深めていくには、どのような学習態度の形成が重要であるか、という問題点を明らかにしたものである。

体育の研究は、運動技能の形成に関する研究の発展として、その形成過程に重要な影響を及ぼすと思われる学習態度に焦点づけた研究を、継続的に実施することとしたこの第一次研究として、児童生徒が体育学習に際して、どのような考え方をし、どのような感じや決意をもってのぞんでいるかという、認知的・情緒的・意志的な傾向を探り、さらにそれらが学習の進展についてどのように変容するものかを実験的に追究し、指導との関連において考察を加えたものである。

教科に対する態度の研究は、学習活動におけるレディネスの一つとして、それぞれの教科に対してどのような態度をもっているか、それは、学業成績・学習法とどのような関係があるかという立場から考察したものである。

なお、この研究は、それぞれ研究協力校の絶大な協力のもとに行なったもので、学校長をはじめ直接間接に協力していただいた教職員各位、ならびに生徒諸子に対して、心から感謝の意を表するしだいである。

昭和40年3月23日

新潟県立教育研究所長 小林 正直